

JOMF 派遣医師便り (2018. 9)

◆シンガポール◆

Singaporean of the year 2017

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

シンガポールはガーデンシティーと言われるほど良く整備され、市内でも緑が豊かである。元来、熱帯雨林気候の土地でなので、常緑広葉樹が繁茂するからであるが、これは反面、きちんと管理しなければ、すぐに元の熱帯雨林に戻ってしまう可能性があるということでもある。現時点では、街中の街路樹とその下、郊外の道路わき、広々とした木々の豊かな公園、その中の広大な芝生地でも、雑草が生い茂って放置されているところは見かけない。これらの木々の枝打ちをし、草木の草刈をしているのは、基本的には近隣諸国から来た外国人労働者なのである。工事現場で働いている人々もまたしかりである。いわゆる 3K 労働はこうした人々に支えられている。もちろん、雇用主は医療保険をかけてはいるのだが、一般的には外国人への医療費は比較的高額であったり、比較的安価な公営の医療施設は待ち時間が長いなどで、実際にはアクセスしにくい面もあり、彼らの医療環境は恵まれているとは言えない。

そうした中、過去 20 年以上にわたり、こうした方々への全人的医療にかかわり、HealthServe という慈善団体を主催してきた医師 (Dr.Goh) が Singaporean of the Year 2017 に選ばれたという記事が Singapore Medical Association の先月号に掲載された。Singaporean of the Year は STRAITS TIMES というシンガポールで最大の新聞社が主催するもので、優れた人道的活動を行った方々が榮譽を受けてきている。そして、シンガポールの首相または副首相、経済社会政策相がその授与を行っている。

Dr. Goh は元々、総合医 (GP, General practitioner) に憧れ、そのまま GP となった。1995 年、モンゴル人民共和国に Non Government Organisation の一員として働いたことが、その後の活動のきっかけとなったそうである。その NGO には様々な分野の人がいたが、それらの人々が共通に持つ人間愛、地元の人々へ安らぎをもたらす活動、またさらに専門的技術指導などを行う様子に感銘を受けたそうである。また、それまではキリスト教的考えの中にいたが、別の宗教の人々と緊密に接することで、自身の世界が広がったということである。その後、1999 年、南インドでも医療活動を行った。そして、2000 年、台湾で開かれた学会で、シンガポールで経済的に恵まれない外国人労働者を積極的に診療しているシンガポール人歯科医とたまたま、出会い、上記の慈善団体を協同で主催することになったそうである。

シンガポールの居住人口 570 万人ほどであるが、外国人比率が多く、約 40%にも達する。外国人は、中華系、西洋系その他、インド、バングラデシュ、フィリピンなど国籍は様々であ

り、経済的状況も上下差（多くは職種による）が大きい。国籍の多様さもさることながら、GP が診る傷病の幅は広く、内科的な疾患のみならず、外傷や精神的疾患も含めて対処しなければならない。

ともすれば経済的利益のみを追求しがちな、拝金主義とも揶揄される社会構造の中で、所得の低い外国人肉体労働者の置かれた医療環境が十分でないことに気がつき、そこに全人的な医療を導入したということはやはり特筆すべきものがあったと思う。

日本を訪れる外国人は既に急増している。この中で、言語の異同はもちろん、社会慣習、宗教、経済格差などを乗り越えて、どう医療を提供していくか（実際は医療分野だけではない）が、既に喫緊の課題となっている。シンガポールの GP のこうした活動は一つのモデルとなるのではないかと思う。